

反差別・人権
私の生き方

(第6期・前期修了レポート
から抜粋)

差別との出会い

仕事上、精神障害をもつ単
身者と関わる事があった。
その兄弟たちは身内に精神障
害者がいることを知られるの



宮崎さん (願児我楽夢) による弾き語り

出会い、見つめ直し、 新たな自分さがし

鳥取市解放大学 第6期・前期日程を終えて

差別問題や人権を知識としてのみ学習するのではなく、差別への怒りをもちながら、人間らしく生きる喜びや人権を大切にしながら人と楽しくつながって生きる人との出会い、そして、そこからさまざまな発見をしていただきたいと企画した前期の日程を終えました。

“一番言いたくないことは、一番わかって欲しいこと”。願児我楽夢リーダーの宮崎保さんによるオープニングの弾き語りから、差別を許さない厳しさと、人間を信頼し、つながっていこうとする優しさを強く感じさせられました。その後の学習でも自らの生き方を考えさせられた講師のみなさんとの出会いがありました。受講生のみなさんも、班ごとの討論や助言者のアドバイスなどにより自分をみつめ、そして振り返り、新たな自分さがしを始めたことが「修了レポート」からうかがえます。後期は、“人権のまちづくり・私の提言”をテーマに、一泊研修のフィールドワークをはじめ、楽しい企画をと考えています。

(財)鳥取市人権情報センター

かけようやく承諾を得ること
となった。

これからの生き方

十数年ぶりに知的障害のある同級生に再会した。彼は、風ほうは昔のまま、屈託のない笑顔で仕事のことなどを生き生きと話してくれた。過去に受けたいじめなどのこともまるでなかったかのように一生懸命話す姿に何かこちらが後ろめたく、恥ずかしい気持ちになり、過去の自分を深く反省した。自分の子どもたちには同じ過ちをさせたくないという思いを強く持った。父親としてこれから子どもたちに何を伝えてやるのだろうか。そう思ったときに、今後、いかに自己解放し、どんな生き方をしていくか、それが自分に課せられた課題であると思っっている。今までの自分を振り返ることの少なかつた自分にとって、解放大学に参加し、差別に気づき、それに対する自分の生き方を語ることはどんなに大切なことを学ぶことができた。

を恐れ、その存在を隠して生活し、関わりを拒絶していた。身内からの関係も閉ざされ単身生活もままならず、医療機関の指導のもとで入院を繰り返して、作業所で軽作業をしながら暮らしている。支えてくれるべき身内からも疎んじられ差別される、そんな実態があることを知った。

さまざま問題を一人ひとりが抱えながら生活している。現実には存在する差別を目の当たりにするたび、憤りとジレンマを感じつつ、「差別って一体何だ」という想いを強く意識させられた。

そんな中、自分自身の結婚に際し、自分の身内の中の差別意識を知ることとなる。結婚したい女性がいると言った時、家が同和地区の出身である

と知った時から突然思いもよらなかつた反応を受けることになった。「家に傷がつく」など、世間体や家ということを強調し、反論しても耳を貸さず、本人の人間性を全く見ようとしない状態だった。周囲から反対され孤立した状態となっていた。何とか説得してみせると強く自分に言い聞かせながら、数年間